



TITLE:

リカアドウの恐慌論

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. リカアドウの恐慌論. 経済論叢 1929, 28(1): 78-105

ISSUE DATE:

1929-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129703>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第 卷(十二第)

行發日一月一年四和昭

新年特別號

營利の事業に屬せざる一時の所得 . . . 法學博士 神戸 正雄

包括社會學概念批判 . . . 文學博士 米田庄太郎

明治初年の大阪の新工業 . . . 經濟學士 黑 正 巖

リカアドウの恐慌論 . . . 經濟學士 谷口 吉彦

豫算に依る企業の統制 . . . 經濟學士 大塚 一朗

交通事業の經營主體 . . . 經濟學博士 小島昌太郎

明治初年大阪の御用金 . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

リカアドウの恐慌論

谷口吉彦

- 一、古典學派の社會的存在と其の恐慌論一般
- 二、古典學派に於けるリカアドウ恐慌論の地位
- 三、彼れの經濟的經驗と一七九三年の恐慌
- 四、彼れの經濟的獨立と一七九七年の恐慌
- 五、彼れの經濟的研究と一八一〇年及び一八一五年の恐慌
- 六、彼れの『經濟原論』と一八一九年の恐慌
- 七、リカアドウ經濟學に於ける恐慌論の地位(以上本號掲載)

- 八、資本の蓄積と生産の制限
- 九、一般的恐慌と部分的恐慌
- 一〇、部分的恐慌の原因
- 一一、總括及び部分的恐慌の批判
- 一二、欲望無限説、物々交換説、生産無制限説の批判

以上

一 古典學派の社會的存在とその恐慌論一般

古典學派に屬する經濟學者は、彼等の社會的存在に制約されて、その恐慌理論に於て特に興味ある發展を示してゐる。彼等は十八世紀の後四半期より、十九世紀の前四半期に至る約半世紀にわたつて、恰も資本主義經濟組織の成立とその時を同じうして存在した。産業革命を経て、漸く發展の途につきつゝあつた當時の資本主義に於ては、恐慌はいまだ其の十分なる形態に於て顯現

するに至らない。一八二五年以後の諸恐慌が、近世的意味に於ける經濟恐慌なることは、多くの學者の一致する所であるが、總てのもの、發展に於けると同じく、近世的恐慌も亦、決して直ちに完成されたる形態に於て其處に現はれて來たものでもなく、また決して突如として無より有を創造し出したものでもない。

産業革命の前夜に位するスミスの時代は姑らく措き、すでに此の變革が一應の完成を遂げて、資本主義の成立を確定したリカアドウ及びマルサスの時代に於ては、此の制度に特有な近世的恐慌も亦、此の成立と共に其の中にはぐまれつゝあつた。一七九〇年代より一八二〇年前後に至る間の數次の恐慌及び一般的不況は、後に述ぶるが如く、偶然的な原因に支配さるゝこと強く、従つてそこには多分に前世的恐慌の痕跡を留めてはゐるけれども、而かも尙ほ後代の恐慌に發展すべき多くのモメントを其の中に包含してゐた。それ故に、古典派經濟學者として正當に一括せらるゝ一團の學者は、資本主義制度に對する認識の根本的態度に於て、一括さるゝ程度の統一を示してゐたにも拘らず、此の制度の中に芽生えつゝあつた恐慌の認識に於ては、彼等相互の間に著しき分裂乃至對立を示すに至つた。此のことは即ち、客觀的實在は常に單純なる統一物若くは單純なる對立物として存在するものにあらざることを示すと共に、之に働きかける主觀的認識も亦、單純なる外界の消極的反映にあらざることを示すものであらう。

かくて十八世紀から十九世紀への過渡は、同時に恐慌現象に關しても亦、前世的より近世的への過渡期であり、前者の凋落死滅と錯綜して、後者の發生成長する時代であつた。此のことは、多くの恐慌史家の研究より容易に推論せらるゝ所であり、今ま更に史的材料を蒐集して之を論證することは、吾々の當面の目的ではない。此の小論の目的とする所は、かくの如き時代の歴史に直面せる古典派經濟學者が、かゝる時代的現象を如何に認識したかを明らかにし、其の恐慌理論が彼等各々の有する理論的態系並びに研究方法に對して如何なる關係を有するかを考察し、彼等相互の間に於ける理論的並びに事實的交渉を探り、彼等を其の歴史的存在に於て觀察することにより、恐慌論の視角より見たる古典派經濟學の史的發展を窺はんとするにある。此の場合吾々は、出來得る限り其の時代の歴史的事實を顧みることによつて、彼等を一の歴史的存在として認識し、彼等相互間の理論的並に事實的交渉を考證することによつて、其の各々を全系列の一員として觀察し、彼等の恐慌理論を其の各々の理論體系の一部面として觀ることによつて、之を全體的に理解し、かくて古典學派の恐慌理論に對して、理論的歴史的に、全體的理解と批判とを試みねばならぬ。

二 古典學派に於けるリカアドウ恐慌論の地位

吾々は先づ第一にリカアドウを檢討する。彼れは根本的にはアダム・スミスに據り、近くはジ・エームス・ミル及びセイを承けて、一般的恐慌の否定を主張する。それはスミス以後、若くは更にフイジオクラート以後、經濟學者の間に一般に信ぜられつゝあつた所の『社會的調和の一般理論に即して與へられた』ものであり、自由競争による自然的調節に絶對的の信頼を置く所の古典學派の理論に其の根柢を有つてゐる。此の限りに於て、リカアドウの恐慌理論は、古典派の一般性を有し、スミス以下の諸學説と共通する所を有するが、それと同時に彼れの恐慌論は又、其の社會的存在並びに彼れ獨自の研究方法に制約されて、現實には著しき特殊性に於て存在する。かくしてリカアドウは、同じく古典學派に屬する他の一派の恐慌論——マルサス以下の一般的恐慌肯定論——に對立するに至つた。

マルサス一派も亦、根本的には『社會的調和の一般理論』に立ち、自由競争による自然的調節に信頼する點に於て、古典學派の一般性を有するものではあるが、彼等の社會的存在と其の實證的方法是、資本主義制度の統一的成立と共に、すでに其の中に内在的發展を遂げつゝある分裂的要素をも看過することを許さなかつた。

かくて一方にはリカアドウを主將とする恐慌否定論と、他方にはマルサス及びシスモンズを圓將とする恐慌肯定論と、二者相對立して激しき理論的闘争を見るに至つたのであるが、かくの如

1) W. Heinrich; Grundlagen einer universalistischen Krisenlehre (1928) S. 6.

きは、之を今日の吾々より見れば、一見奇異の感を免れないであらう。蓋し一般的恐慌の存在は、今日すでに疑ふべからざる事實として、何人も感覺的に之を経験する所なるのみならず、一般にかくの如き恐慌事實の有無といふが如き問題は、直ちに之を感覺的に實證し得るものゝ如く思はるゝにも拘らず、その存否そのものに就て、全く正反對の二つの主張が同時に存在し得たからである。吾々はたゞ彼等の理論をば、その現實の形に於て具體的に、その歴史的存在に於て社會的に、之を觀察することによつてのみ、其の理由を發見し得るであらう。以下吾々は先づリカアドウに就き、特に當時に於ける恐慌史的事實に特別の注意を拂ひつゝ、その時代の經濟的事實と彼れの研究との相關關係を見るであらう。註

註 吾國に於て近來盛んに行はるゝリカアドウ研究は、主として彼れの價值論を中心とせるものである。彼れの恐慌論を取扱つたものは、私はまだ之を發見しない。たゞ増井幸雄氏の一論文は、『セイの市場理論を中心として』、此の點にも觸れてゐる。

經濟學說史に關する吾國の研究も、近年頗る盛んとなつて來たが、一般的に見て是等の諸研究は、其の時代の背景を無視する嫌がある様に思はれる。

三 リカアドウの經濟的經驗と一七九三年の恐慌

リカアドウが普通教育を終へて、父の經營する株式取引業に入つたのは、彼れ十四歳の時、一

2) 増井幸雄氏；『生産消費の均衡に關する論争』（三田學會雜誌第十九卷第四號
大正十四年四月、二七頁以下）

七八六年であつた。此の前後を中心とする十年間、即ちアメリカ獨立戦争の終了した一七八三年から、ナポレオン戦争の始まつた一七九三年までの約十年間は、英國の産業革命期に於ける最長の平和期間であり、此の期間に於て、産業革命は先づ最初の一大飛躍を遂げたのであつた。これに先だつ十數年に亘つて、相繼いで起りつゝあつた紡績機械に關する諸發明は、『從來たゞ從屬的役割を演ずるに過ぎなかつた紡績事業をして、一七八二年以來俄かに強大な發展をなさしめ、英帝國に於ける最も重要な産業の一つたらしむるに至つた。』¹⁾ 綿花の輸入量は、一七八一——九二年に於て約七倍し、²⁾ 綿製品の輸出價額は、一七八〇——九二年に略々六倍して、³⁾ 前後に比類なき發展を示してゐる。製鐵業、石炭業其他の工業に於ても、内外の交通機關に於ても、對内及び對外の商業に於ても、新しき資本主義的組織と規模に於て、特に著しき最初の發展を遂げたのは、この十年の平和期間であり、そしてリカアドウは、實に此の眼まぐるしき資本主義最初の生育期に於て、經濟的活動の最も尖鋭化する株式取引界に身を投じたのである。

リカアドウが父の意に反して其の愛人との結婚を斷行し、同時に事業の上にも家事の上にも、父とは全く分離獨立した株式取引業を始めたのは、彼れが丁年に達して後まもなくの一七九三年であつた。⁴⁾ 然るに此の一七九三年は、リカアドウ個人の歴史に於けると同じく、『英國の歴史に於て、歐洲の歴史に於て、更に文明世界の歴史に於て、最も記憶すべきものに屬する』⁵⁾ 年であつ

- 1) M. Bouniatian; Geschichte der Handelskrisen in England. (1908) S. 152.
- 2) E. Baines; History of the Cotton Manufacture in Great Britain (1835) p. 347.
- 3) E. Baines; ibid., p. 349.

て、此の年二月には、それ以來一八一五年に至る二十二年の久しきに亘つて斷續した所のかのナポレオン戦争の宣告を見たのみならず、『此の重大な戦争の始まつた瞬間に於て、商業的破産をなす者が極めて多數となつて來た。』⁶⁾即ち一七九三年の恐慌が襲來したのである。それ故にリカアドウが其の獨立事業に第一步を踏出した其の年が、即ち恐慌史上に重要な地位を占むる一恐慌の年に相當する。

一七九三年の恐慌は如何なる性質のものか？ 先づ第一に此の恐慌は、對佛宣戰と其の時を同じうし、従つて戦争と言へる偶發的原因によつて惹起されたもの、如く思はれ、また實際に於て、『投機及び物價騰貴の發端が、一七九三年の戦争の開始に起つたとする極めて一般的な印象』⁷⁾があつた。註

註

トウークは、『戦争の宣言が信用の混亂に實質上の貢獻をなした』ことを主張する一人として、フランシス・バアリングを挙げ、『一七九三年の困難を惹き起すに極めて實質的に貢獻した一事情は、唐突に不意になされた宣戰の布告であつた：……』といふ一句を引用してゐるが、⁸⁾バウニアアーンに據れば、前記バアリングは、『戦争は一七九三年の恐慌の原因ではない』と主張したものとされてゐる。⁹⁾今直接にバアリングの著書に就て之を検索するの便宜を有たぬ。

併し乍ら更に仔細に事實を視察するならば、その必ずしも然らざることは、此の恐慌が既に前年の秋に其の端を發し、『前例なき破産者の數は、一七九二年十一月に於て、此の春夏に起つた破

4) J. H. Hollander; David Ricardo (1910) p. 34.
 5) T. Tooke; A History of Prices, vol., I. (1838) p. 176.
 6) L. Levi; History of British Commerce (1872) p. 69.
 7) T. Tooke; A History of Prices, vol., I. (1838) p. 178.
 8) T. Tooke; ibid., p. 176.

産數を驚くべく超過してゐた』といふ事實に依つても窺はれる。いま此の恐慌の性質を窺ふべき資料として、マックファースンの『記録』¹²⁾は、特に興味あるものである。

『最も手廣く營業し最も信用の鞏固であつた多くの商家も破綻した。そして彼等の破綻は、國內到處にある極めて多數の取引先及び關係者を捲き込んだ。莫大な資金を擁し、今の今まで其の債務を完済しつゝあつた立派な堅實な商家でも、支拂を停止するの已むなきに至つた。銀行の或る者も休業を餘儀なくされた。』

『一般的な困難及び恐怖の場合には、あらゆる人々は、隣人を疑はないまでも警戒するから、相當の金額を一時的に用達さへすれば、其の窮狀を脱し得る多くの人々も、何等の方便を得ることも出来なかつた。機械を擔保にし、又は運河株を擔保にしても、何等の金額を得ることも出来ない。かゝる資産の價值は、暗雲に閉された國家や商業や工業の沈滯狀態に對する懸念から、その價值を消失した様に思はるゝからである。若干の貨幣を有するものは、之を何處に安全におき得るかを知らず、之を使用せずに金庫の中にしまつておいた。』

『かゝる一般的な困難の中にあつて……國家の必要を遙かに超えて其の數を増加してゐた地方銀行は、その銀行券を流通せしめんとする熱望のために、彼等自身の災難を自ら招くことゝなつたが、彼等は最も甚だしい困窮の中にあつた。従つて彼等は、其の關係者の間に、困難^{デイスレス}と

- 9) M. Bouniatian; Geschichte der Handelskrisen in England (1908). S. 163.
- 10) F. Baring (Lord Ashburton); Observations on the Establishment of the Bank of England, and on the Paper Circulation of the Country. (1797)
- 11) D. MacPherson; Annals of Commerce, vol. IV. (1805) p. 266.

破綻^{破綻}を傳播する最大のものであり、英蘭銀行の現金枯渴の主要原因であつた。……是等の地方銀行（或者は二五〇といひ、或者は四〇〇以上あつたといふ）の中、一〇〇以上のものが破綻したのである。¹³⁾』

是等の『記録』によりて見る時は、此の恐怖は、單に特殊な生産部門又は商業部門に限らるゝものではなく、各種の部門に亘り、商工業より金融業まで包含して、かなりの程度に『一般的』なものであつたことが判る。又これを地域的に見ても、イギリス全土より歐羅巴及びアメリカの主要都市に亘り、或る程度に國際的性質を有するものである。¹⁴⁾

然らば此の恐慌は、如何なる原因によつて惹起されたものか？

『有利な商業の九年に亘る平和期間に於て蓄積されたる富の中、その重大なる部分は、國內航路（運河）に投資された。是等のものは、一般的には、時が來れば極めて生産的なものではあるが、甚だ多額の資本を投するを要し、且つ其の生産性は、全くその國に於ける事業の一般的繁榮に依存するものである。』

『此の時に當つて又、商人及び工業家の事業は極めて大規模に擴張され、これに先だつ何れの時代に於けるよりも大きくなつた。これは繁榮増進の自然的結果であるが、また時としては、之に續いて起る困厄の原因となる。』¹⁵⁾

12) D. MacPherson; Annals of Commerce, vol., IV. (1805) p. 265-270.

13) D. MacPherson; ibid., vol., IV, p. 266-267. (傍點は筆者による、以下皆同)

14) T. Tooke; A History of Prices, vol., I. (1838) p. 176-177.

15) D. MacPherson; ibid., p. 265-266.

『一七九二年はイギリスの産業的膨脹に於ける第一階段の絶頂點であつた。一七九二年の中頃に先だつ最後の二年間は、イギリスの從來の經驗に於て最も繁榮したものである。此の二年は異常なる一の繁榮期の終結を成した。然るに一七九二年の秋になつて、力強い反動起り、産業的進歩をして一時逡巡せしめたのである』¹⁶⁾

『消費の増大したに拘らず、より大なる機械生産と、大なる輸出とは、外國市場と同じく國內市場にも商品過剰を生ぜしめた。製造品は販路を發見するに困難を感じた。かゝる事情の下に、生産物の高き價格を維持することは出来ない。かくて一七九二年の秋までに著しく下落した。……

……農業生産物は一七九一年の農作を受けて、著しき價格下落を見た。……

『商品市場に於ける物價下落と、市場に於ける製品過剰は、實業界に困難を齎らした。此の困難は、支拂不能者及び破産者の増加となつて現はれた。一七九二年十一月には、破産宣告者は一〇五といふ異常な數に達した。然るに之に先だつ數ヶ月には、僅かに此の半數を示したに過ぎぬ』¹⁷⁾

是等に由りて見れば、此の恐慌の根本原因は、戦争の勃發といふ政治的原因よりも、寧ろ過去十年の平和期に於ける産業的膨脹の結果たる經濟的原因によるものであり、『外國市場に對すると同じく國內市場に對する一の生産過剰』¹⁸⁾にその源を發するもの、様である。此のことは又、恐

16) M. Bouniatian; Geschichte der Handelskrisen in England (1908) S. 160.

17) M. Bouniatian; a. a. O. S. 162.

18) M. Bouniatian; a. a. O. S. 170.

慌の年に於て、綿花の輸入量が四六%を減じ、綿製品の輸出量が一五%を減じ、¹⁹⁾外國品の再輸出には殊んど減少なきに拘らずイギリス製品の輸出額が二五%の減少を示せることによつても證明される。²⁰⁾

此の意味に於て、此の恐慌は近世的恐慌の一特徴たる生産過剰に基づくものであり、『イギリスの大なる産業的恐慌の最初のもの』²¹⁾といふべく、又これによつて『新たなる産業時代に這入りこむだことを示す』²²⁾ものとも言ふことが出来る。

然るに政治家流の近視眼的觀察は、此の原因をより手近に求めた。一代の大宰相ピットは、恐慌救済を目的とする議會の特別委員會に報告して、『破綻者が、十分なる資本なくして流通券を發行した店に對する取付に、始まつたことは、各地方から情報されてゐる』²³⁾といひ、スコットランド王立銀行の支配人インネスは、『今ま起つて居る困難は、普通市場に於ける貨物需要の減退によるよりも、寧ろより多く……製造家に向つて其の製品の支拂をなす場合に行はる、長期手形の割引が、現に困難となつてゐるがためである』²⁴⁾との意見であつた。かくて議會に於ける『公けの意見は、此の恐慌の責任を、地方銀行の發券過多に歸した』²⁵⁾これが『不當なる非難である』²⁶⁾か否かは別として、發券過多の事實は、過剰生産の一の結果であると共に、また恐慌勃發の直接の一動機であつたことを記憶せねばならぬ。

19) E. Baines; History of the Cotton Manufacture in Great Britain (1835)

p. 347-349.

20) M. Bouniatian; a. a. O. S. 170.

21) M. Bouniatian; a. a. O. S. 171.

22) M. Bouniatian; a. a. O. S. 173.

同時に此の恐慌は、決して戦争その他の偶發的原因と無關係には存しない。『戦争の勃發は、たとひそれは明かに根本的な原因ではなかつたとしても、必然的に、既に存在した混亂の原因に對して、何物かを附加せねばならぬ。それはたゞに戦争目的の國債によつて惹起された利子歩合の騰貴によつてのみならず、需要の方向の或るものに於ける避くべからざる擾亂デスタビリスによつて生じた』²³⁾即ち『戦争は單に、既に勃發してゐた恐慌に對して、一の助成的事情たるに過ぎなかつた』²⁶⁾が併し『あらゆる産業部門は、直接間接に此の事變(戦争)のために困窮した』²⁹⁾のは事實である。更に又、此の恐慌に先だつ商品投機の主要な一動因は、當時イギリスを中介として大陸諸國に砂糖及びコーヒーを供給してゐたサン、ドミンゴウの革命騒亂であり、此の投機の反動として起つた一七九二年の物價下落の先驅をなしたものは、一七九一年の豐作であつた。³⁰⁾

要するに一七九三年の恐慌は、經濟的には、過剰生産と商品投機と發券過多との三者の相關々係によつて惹起されたものであり、この限りに於て、それは多分に近世的性質を具有するものである。同時に又、戦争その他の偶發的な非經濟的原因の與れることも明かであつて、確かに、一の過渡的性質を有するものであると認めねばならぬ。

四 リカアドウの經濟的獨立と一七九七年の恐慌

- 23) D. MacPherson; Annals of Commerce, vol., IV. (1805) p. 267.
 24) D. MacPherson; ibid., p. 268.
 25) M. Bouniatian; a. a. O. S. 171.
 26) M. Bonniat; a. a. O. S. 171.
 27) T. Tooke; A History of Prices, vol., I. (1838) p. 177.

偕て一七九三年父から分離した當初のリカアドウは、『限られたる彼れ自身の財源を以つて、新世帯の責任を加重し、從來の裕福な生活から獨立した生活への過渡は、甚だしく危険であつた』¹⁾といはれるが、彼れの家名が既に株式界に有名である上に、彼れ自身の性格は既に一般に認められ、尊敬されてゐたのみならず、彼れが父と分離するに至つた事情が了解され同情されてゐたから、彼れは『最も有望な成功の期待』²⁾を以つて、仲買人としての活動を始めた。のみならず一七九三年の恐慌を通過した後の『商業及び工業は、恐慌後まもなく——一七七四年に於て——新たな膨脹をなし、一七九六年には一時その絶頂に達した』³⁾のであるから、『時代は敏捷な金融的冒險と取引所業務に有利であつた。』⁴⁾わがリカアドウが此の好機を遺憾なく利用して、『總ての期待以上』⁵⁾利益を上げ得たことは怪しむに足らない。『數年の間に、恐らくまだ二十六歳に達せぬ前に、彼れは自ら經濟的獨立を確保した』⁶⁾のである。

かくて彼れは經濟的獨立の基礎を確實にして、此の方面に稍々心の餘裕を發見したのであらう、此の前後——二十五歳の頃——から、その餘暇を利用して自然科學の研究を始め、數學、化學、地質學及び鑛物學の各々に就て、可なりの程度に没頭したのであるが、併し是等の自然科學に對する研究は、彼れが一七九九年バスの溫泉町に於て、巡回文庫の中にあつたアダム・スミスの『諸國民の富』を發見するに及んで、全く放擲され、これ以後に於ける彼れの關心は、専ら經濟

28) M. Bouniatian; a. a. O. S. 163.

29) L. Levi; History of British Commerce (1872) p. 69.

30) T. Tooke; ibid., p. 81. 178; M. Bouniatian; a. a. O. S. 162.

1) J. H. Hollander; David Ricardo. (1910) p. 35.

2) J. H. Hollander; ibid., p. 35.

學の範圍に限らるゝことゝなつた。⁷⁾

然るにこれと前後して一七九七年には、第二の恐慌が襲來した。此の恐慌は、『その原因が、同じく國家の急速なる經濟的發展に基づく限りに於て、前の恐慌と共通の點を有する』⁸⁾ものであるが、併し『生産過剰は一七九七年時代には、一七九三年の恐慌前に於ける程には大きくなかつた』¹⁰⁾し、寧ろこれは、貨幣——銀行——金融恐慌ともいふべきものであつた。即ち資本蓄積の結果より來る商工業及び運河への投資、莫大なる戰費の支出、連年の凶年に伴ふ穀物輸入のための貨幣流出、これ等によりて流通手段の缺乏を惹起し、利子歩合の騰貴となり、金融市場の逼迫となり、諸銀行の破綻となり、最後に英蘭銀行の兌換停止となつて終結したのである。しかも此年二月に勃發した銀行取付の直接動機となつたものは、また全く政治上の事變——千二百名のフランス陸戰隊がウエールスの一部に上陸したこと——にあつた。

是等によりて見る時は、此の恐慌も亦、資本主義的な生産過剰や、蓄積資本の固定資本への投資に、その原因を有すると共に、他方に於て、戰爭、凶作、偶發事變等にも原因するものであることが確かめられる。

五 リカアドウの經濟的研究と一八一〇年及び一八一五年の恐慌

- 3) M. Bouniatian; Geschichte der Handelskrisen in England. (1908 S. 174.)
4) J. H. Hollander; ibid., p. 35.
5) J. H. Hollander; ibid., p. 35.
6) J. H. Hollander; ibid., p. 35.

一七九九——一八〇九年は、リカアドウの生涯に於ける壯年期を劃するものであつて、此の時代に於て彼れは、一方に有力なる取引員として指導的活動をなすと共に、他方に經濟學の研究思索に没頭し、多くの經濟學者思想家と交遊を結ぶに至つた時代である。

一八〇二年のアミアン條約は、一年餘に亘る平和狀態を齎したが、一八〇三年には再び英佛の開戦となり、殊に一八〇六年ナポレオンによつてなされたる伯林宣言(大陸封鎖令)は、英國の商工業に大なる影響を齎らさずには措かなかつた。かくて大陸との貿易杜絶は、一八〇七——八年に於ける大陸輸入品の缺乏、従つて其の價格騰貴を來すと共に、北アメリカ合衆國との間に起つた貿易障害は、特に原料品の缺乏と騰貴を呼び、是等の輸入品に對する投機の勃興は、更に物價騰貴を刺戟した。⁷⁾ 他方に於てイギリス海軍の把握した制海權は、よく大陸及び北米に失ひたる輸出市場の代りに、西印度並びに南米の市場を獲得し、此處に急激なる輸出の増進、之に伴ふ投機を激成することゝなつた。⁸⁾

かくの如き事情の下にあつて、曩に一七九七年以來兌換を停止されてゐた銀行券が、増發——減價され得ることは容易に想像され得る。『英蘭銀行の狀態及び爲替相場が、満足な健全狀態にあつたのは、一八〇八年の秋までに過ぎなかつた。一八〇八年の最後の三ヶ月に於て、何等注意すべき流通券の増加は起らなかつたけれども、爲替相場は急激に下落し、地金準備が著しく減少

7) J. H. Hollander; *ibid.*, p. 37. J. R. McCulloch; *The works of David Ricardo* (1888) p. XVII.

8) M. Bouniatian; *a. a. O. S.* 173.

9) T. Tooke; *A History of Prices*, vol. 1. (1838) p. 200.

10) M. Bouniatian; *a. a. O. S.* 190.

した。³⁾『一八〇八年の終りに於て、急激な爲替の下落にも拘らず、銀行券の發行は、之を收縮するか又は從來通りに止むる代りに、それ以來暫時の間、その分量を増加した。……大なる金紙の開きが起り、地金に關する論争……を捲き起したのは、此の時機であつた。⁴⁾』

經濟學者としてのリカアドウを世に紹介した彼れの處女作『地金の高き價格』(一八一〇年)は、即ちかくの如き歴史的背景の下に、一八〇九年モウニング、クロニクル紙に連載した『金の價格に就て』といふ書簡の増補出版されたものであるが、リカアドウが初めて著者として世に見えた此の年、一八一〇年は又、恐慌の年である。此の恐慌も亦、種々なる原因の錯綜に基く。戦争並びに政治的事情に關して起つた大陸及び北米市場の閉鎖、南米市場の開拓、是等に刺戟された投機の勃興等々は、著しき物價騰貴を惹起し、次いで一八〇九年以後に起つた大陸商品及びアメリカ原料品の輸入増加は、物價の反動的下落を呼び、一八〇九年の最初の三ヶ月間に平均三〇%の下落を見て、此の年の下半期に入つて、果して販賣停滯に陥つた。それ故に、南米市場に對する輸出過剰と、大陸商品及びアメリカ原料品の輸入過剰とは、此の恐慌に於て特に注意すべき現象であり、従つて『一八一〇年の恐慌は固有の意味に於ける商業恐慌(商品商業恐慌)である』⁵⁾と言ひ得るかも知れぬ。

併し乍ら既に當時の資本主義に於ては、商業恐慌は單に商業の範圍に止まるものでなく、その

1) T. Tooke; *ibid.*, p. 272-276. 290. 292.

2) T. Tooke; *ibid.*, p. 276-279. 290.

3) T. Tooke; *ibid.*, p. 289.

4) T. Tooke; *ibid.*, p. 350-51.

5) 拙稿『リカアドウ經濟論文集の刊行』(經濟論叢第十七卷第六號、大正十二年十二

悲慘なる窮狀は、寧ろ製造工業の上に現はれてゐる。『是等の（商業上の）破産は、全國到る所に於て、あらゆる種類の貨物の製造業者に對して、恐ろしく影響した。そして一般的な信用の缺乏が、製造業者と輸出商人との間に存在した。……ランカシアに於ては、綿業者は……甚だしく困難してゐる様に見え、事業は全く中止してゐる。マンチニスター其他に於ては、諸家は毎日毎時休憩業してゐる。綿花は如何なる價格でも需要なく、製品の輸出は、僅少の精製品を除いては、行はれない。』⁷⁾議會に於ける商業信用法案を説明した大藏大臣の演説は、更に此のことを裏書する。曰く『すべての重要な製造業者は、彼等の事業を縮少し、或者は全く中止するの餘儀なきに至つた。委員會の報告によれば、全國の綿業者中、工場に使用する労働者の一半を減員しかつたものは殆んど一人もゐない様である。より小規模の製造業者は、その傭人の全部を解雇した。第一流の製造業者の下に残留したものも、引下げられた勞賃で残つてゐた。此の結果は必然に、特別委員會の報告に明らかなる如く、最も悲慘なる困難が、多くの工業地方を通じて、蔓延することゝなつた……』⁸⁾と。これによつて明らかなる如く、此の恐慌も亦、流通停滯が生産停滯を惹き起し、多數の工業失業者を出してゐる點に於て、すでに近世的分子を多量に包含してゐる。而も又、大陸封鎖ならびに北アメリカとの係争といふ政治的原因に基いて起れることも明らかである。

月) 参照。

6) M. Bouniatian; a. a. O. S. 221.

7) T. Tooke; *ibid.*, p. 305.

8) T. Tooke; *ibid.*, p. 307.

此の恐慌の前後數年間に於けるリカアドウの興味と研究は、主として通貨問題に限らるゝものゝ如くである。一八一〇年の地金委員會は、根本的にはリカアドウの主張に基く報告を決定したが、此の報告に反對するボサンケーを反駁するため、彼れは一八一一年『地金委員會の報告に關するボサンケー氏の實際的觀察に對する答辯』を公にし、次いで一八一六年には『經濟的な健全な通貨に關する提案』を公にして、此の方面に關する研究を一應まとめ上げることが出來た。⁹⁾然るに此の前後一八一五年には、更にリカアドウの經驗した第四の恐慌があつた。

一八一五年の恐慌は、前の恐慌が、戰爭による大陸及び北米市場の閉鎖に基くに反し、これは平和恢復に伴ふ兩市場の開始に關聯する。前の恐慌による打撃は、その翌一年の下半年より次第に恢復して、一二—三年の間に於てすでに物價騰貴の傾向を見たが、一三—四年に亘る大陸の政治的變動(ナポレオンの敗北)は、平和恢復後に於ける好況を豫想せしめ、大陸向きのイギリス製品及び植民地商品に對する思惑を煽つて、遂に一八一四年以後の甚だしき物價騰貴を惹起するに至つた。¹⁰⁾之と共にイギリス工業も亦、需要の増大に伴ふ膨脹を示し、大陸及び北米への思惑は輸出先に於ける商品過剩を來し、從つて輸出品の下落と輸出商の破綻を招來した。他方に於て物價騰貴と交通再開とは著しき輸入増加となり、¹¹⁾在外商品の下落と相俟つて、茲に數年來引續き向上しつゝあつた國內物價は、一八一五年の初頭以來急激に下落を始めた。¹²⁾^{12a)}

9) 拙稿『リカアドウ經濟論文集の刊行』(前出)參照。

10) T. Tooke; *ibid.*, vol. II, p. 5-7.

11) T. Tooke; *ibid.*, vol. II, p. 10.

12) T. Tooke; *ibid.*, vol. II, p. 11-12.

12a) M. Wirth; *Geschichte der Handelskrisen*, (1874) S. 98-108.

元來一八一三——一四年の物價騰貴は、平和恢復に伴ふ大陸需要の豫想に基くものなるが、第一に長期の戦争に資力を傾注し盡した大陸の購買力が、平和恢復と同時に復舊するものではなく、第二に平和恢復は大陸封鎖を解除する代りに、制海權によるイギリス貿易の獨占を失ふこととなり、第三に戦争中のビットの商工業獎勵策は、イギリス産業をして異常に發展せしむることとなり、第四に大陸封鎖による大陸工業の發展は、或る程度の自給を可能ならしめ、且つ或種の商品はイギリスの競争者となり、第五に戦争終熄は莫大なる軍需品の需要を絶つに至る等々のために、平和恢復を豫想したイギリス商工業の發展は、直ちにその限界に達して現實の清算を受けねばならぬ。此の清算行爲が即ち一八一五年の恐慌である。それ故に『一八一五年の商業恐慌は、一八一〇年のそれに對する一の對立物であつて、同じく過度の思惑に動機を與へた所の市場關係の急激なる變動によつて惹き起された。前の場合に於て、過度の思惑及び外國商品の輸入を惹き起させたのは、主として大陸市場及び北米市場の閉鎖であつた。現在の場合には、同じ市場の開始が、過度の思惑特に過度の輸入を招來した……』と見ることが出来る。此の限りに於て、それは根本的には戦争若くは政治的原因に基く市場變化によつて惹き起されたものではあるが、併しその過程に於ては、常に生産過剰若くは供給過剰の現象を伴つてゐる。第一に輸出先に於けるイギリス商品の供給過剰、第二にイギリス國內に於ける輸入品の供給過剰、第三にイギリス國內

に於けるイギリス商品の生産過剰これである。

一八一五年の恐慌は又、同時に農業恐慌を伴つた。これより先き一八〇九、一〇、一一、一二年の四年に亘る凶作は、戦争による穀物輸入の困難と相俟つて、穀物價格の異常なる騰貴を來し、一二年の端境期には驚くべき最高價格に達した。¹⁴⁾同時に驚くべき地代の騰貴となり、農耕地の擴張を見るに至つたが、一三年以後の連年の豊作と、平和恢復による穀物輸入の容易とによつて、一三年の下半年以後は、穀物價格は次第に下落傾向をとり、一四——五年に及んで更に急激なる下落を加へたから、農業企業家は遂に恐慌に陥らざるを得ない。かくて一五年には地主擁護のための穀物條令委員會が開かるゝこととなり、穀物價格、地代、穀物關稅等々に關する農業問題が當時に於ける論議の中心點となつた。¹⁵⁾

六 リカアドウの『經濟原論』と一八一九年の恐慌

リカアドウの興味と研究が、通貨問題より農業問題に轉化し、所謂リカアドウの地代論を生み出すに至つたのは、以上述ぶるが如き歴史的背景によるものなるが、¹⁾他方に於て彼れの經濟學の理論的根柢をなす價值論は、此の時代——一八一五年——の前後に於て、その發展の第二段階を經過しつゝあつた。²⁾一八一六年二月七日附マルサスに宛てた彼れの手紙の最後には、『私はもう

- 14) 拙稿；『マルサスの地代論に就て』（經濟論叢第十七卷第五號、大正十二年十一月）參照。
15) 拙稿；同前參照。
1) 拙稿；同前參照。
2) J. H. Hollander; The Development of Ricardo's Theory of Value.

吾々の以前の問題に就ては多く考へなかつた。たゞ私の困難とする所は、之を他の人々の前に表現するに當つて、恰も私自身に於けると同様の思惟過程に他人を導き來る點にある。私が若し、相對價值若くは交換價值の本源的法則に關する明瞭な洞見を與ふるに當つての障礙を克服し得たならば、私は半ば成功したものである……』³⁾と言ひ、同じく十月五日附のマルサス宛の手紙には、『私は價格及び價值の問題によつて甚だしく妨害されてゐた。是等の點に關する私の以前の考へは、正しくなかつた。私の今の見解も、同じく誤つてゐるかも知れぬ、それは從來考へてゐる總ての私の意見と一致しない結論に導くから。……私は自分の説に、首尾一貫せる形式を與へるまで、仕事を續けるであらう。』⁴⁾と言ひ送つてゐる。

然るに此の『首尾一貫せる形式』を整へて表れた彼れの『原論』は、翌一八一七年の春に至つて公刊された。この公刊に刺激されて起つた價值論争は、彼れの價值論に於ける第三の發展段階を成すものであるが、それは姑く別とし、吾々が問題とする彼れの恐慌論を取扱へる主要なる部分——第十九、二十一章——は、すでに『原論』の第一版より存在し、二年後の第二版は勿論、更に二年後の第三版に於ても、重要な改變なく殆んどそのまゝ包含されてゐる。⁵⁾さて第二版の出た一八一九年は、更に第五次の恐慌を見た年であり、此の恐慌はリカアドウの存命中に經驗した最後のものであるから、吾々は最後に此の恐慌にも一瞥を與へねばならぬ。

(The Quarterly Journal of Economics. Aug. 1904)

3) J. Bonar; Letters of Ricardo to Malthus 1810-1823 (1887), p. 111.

4) J. Bonar; ibid., p. 120.

5) J. H. Hollander; The Development of Ricardo's Theory of Value (The Quarterly Journal of Economics Aug. 1904) p. 476.

一八一五年の恐慌の激動を受けて下落したイギリス國內の物價と歐洲大陸の凶作のために、翌年は著しき輸入減退を見、且つ過剩商品の消化するに従つて、一七年には物價はすでに上向傾向をとり、信用も次第に恢復すると共に、金融市場に於ては、恐慌以來有利なる投資を發見し得ざる資金横溢し、一七年には二十五年來未だかつて見ざる好條件を呈するに至つた。金融市場の此の状態は、一方に投機を助長し、他方に外國投資を刺激して、大陸商品の騰貴、輸入増加を見たのみならず、原料商品に對する思惑は過剩なる原料輸入を導き、價格下落の勢をかもすに至つた。同時に輸出投機は輸出を増加せしめ、一八年に入つては、濠洲、極東、印度、アフリカより北アメリカ、南アメリカに到るまで、世界到る處にイギリス商品の過剩堆積を見るに至り、殊に北アメリカに於ては、此の過剩輸入のために、一八一八——一九年の恐慌を惹起した程であつた。イギリスに於ては、一八年以後の原料及び植民地商品の輸入増加と、一八年の凶作に伴ふ莫大なる穀物輸入と、資金の蓄積より來る外國投資と、是等のために國際貸借は著しく惡化し、爲替の下落、金の流出となり、一時その豊富を誇つた金準備は一八年以來急激に減少して、此の年の下半期には金融市場の壓迫を感じるに至り、年末に起つたフランス國債の下落による大陸恐慌に刺激されて、遂に一八一九年二月に至つて恐慌の勃發を見るに至つた。

此の恐慌は其の範圍と程度に於て前二者に及ばなかつたけれども、此の三つの恐慌は互に相關

- 6) 第二版(1816)に於て第十九章に註二つ(p. 252-253; p. 257) 第三版(1821)に於て更に同章に註一つ(p. 254-255)及び第二十一章に一文章(p. 280)が挿入された。
- 7) T. Tooke; A History of Prices, vol., II. (1838) pp. 77-79.
- 8) M. Bouniatian; Geschichte der Handelskrisen in England (1908) S.

聯せるものであり、殊に最後の恐慌は前者の後劇を演じて、『英國經濟史上に於ける恐慌に富む時期の終結を成す』⁹⁾ものである。それは過剰資本の蓄積に伴ふ過剰生産及び過剰輸出といふ經濟的原因に基いてゐるが、同時に凶作其の他の偶然的事情をも動因としてゐる。

一八一九年の恐慌に引き續く不景氣は、殆んどリカアドウの生存中に亘つて繼續してゐる。恐慌後の『物價下落のために消費の増加した結果として、産業の狀態は或る程度に改善された。けれども全體としては、物價下落の繼續のために、商業及び工業に於ける活動は、一八二四年の初頭までは、かなり閑散なものであつた。一般に……一八二〇——二四年の經濟狀態……商業及び工業は、商人及び工業家の直接の損失はなかつたけれども、低い利潤をもつて満足せねばならず、此の低い利潤は、新たな資本をその事業に投資せんとする何等の刺激をも與へない狀態にあつた』¹⁰⁾のである。そして最初に述べたる恐慌に關する論争の行はれたのは、主としてリカアドウ『原論』第二版の刊行以後、即ち此の不景氣沈滞の時代に於てゐた。

以上リカアドウの活動期およそ三十年の間に於て、彼れの經驗したる恐慌は、一七九三、九七、一八一〇、一五、一九年の五回に及び、是等は既に述べ來れる如く、各々その一般性を具へたる特殊性に於て存在する。従つて是等の恐慌に對する史家の見解は必ずしも一致しない。第一に、近世的恐慌の發現を最も新しく最も慎重に見る見解を代表するものとして、ツガン、バラノウス

キ―を擧げ得る。彼れは、『恐慌の週期的反覆は、英國に於て漸く今世紀（十九世紀）の二十年代を以つて始まる。一八一一年、一八一五年及び一八一八年の恐慌は、其の型によれば、前世紀の恐慌に屬する——是等の恐慌は、週期的でなく、且つイギリスとナポレオンとの間に行はれた大戦争と直接に關聯してゐる』¹²⁾との理由で、是等を除外し、一八二五年の恐慌を以つて最初の近世的恐慌とする。第二に之と反對に、近世的恐慌の發現を比較的に古く認むるものゝ代表として、ポウナル氏を擧げ得る。彼れは、『十八世紀の末葉以來起つた最も重要な恐慌も同じく注意に値する。此の時代よりも以前のものは、歴史的には興味あるものではあるが、金融及び商業上の業務を實行する方法に於て、現今に於けるとは殆んど共通點を有たない所の特徴を表してゐる』¹³⁾この理由で之を擯愛し、一七九二——三年の恐慌を以つて叙述を始めてゐる。第三に兩者の中間に位する一派を代表するものとしてレスキュールを擧げ得る。彼れは、『十八世紀までは、生産は主として農業的であり、恐慌も亦同じく、殆んど常に農業的であつた』¹⁴⁾と述べて、第十九世紀最初の恐慌（一八一〇年）を以つて恐慌史の筆を起してゐる。註

註 此の説を採るものは、フランスの恐慌論者に多い。前掲レスキュールの外に、ラコムブも亦、『純粹に産業的な最初の重要な經濟恐慌は、一八一〇年のそれである』¹⁵⁾と言ひ、アルヴァも『十九世紀の初頭以來現はれた近世的恐慌は、之に反して甚だしく異なる性質を有する』¹⁶⁾と主張する。

- 12) Tugan-Baranowsky; Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England (1901) S. 66.
- 13) G. H. Pownall; Art., "Crises, Commercial and financial" (Palgrave's Dictionary of P. E. vol., I. (1925) p. 455).
- 14) J. Lescure; Des Crises générales et périodiques de Surproduction (1923) p. 1.
- 15) E. Lacombe; La Prévision en matière de Crises économiques (1926) p. 6.
- 16) S. Arwas; La Crise économique de 1920 en France (1923) p. 9.

ジユグラは、『吾々の研究範圍を限定するならば、恐慌は、イギリス及びフランスに於て、一八〇〇年以來殆んど同じ時期に勃發し且つ終熄して、規則正しく併行的に進行を續けたことを確證する』と主張して、一八〇〇——一八〇五年を『第一期』とする。

ウキルトは國際間の『連帶的相互關係』は一八一五年の恐慌にまで遡つて認めることが出来るとの理由で此の恐慌以後を採る。主としてウキルトを根據としたハインドマンも亦一八一五年の恐慌からその記述を始めてゐる。

此の時代に於ける近世的恐慌への過渡を認めない代表的のものとして、カツセル教授をあげる。彼れは寧ろ一八七〇年以後の經濟變革、從つて之に伴ふ恐慌の質的發展を高調する。

七 リカアドウ經濟學に於ける恐慌論の地位

リカアドウにとつては、『經濟學に於ける主要問題』は、『分配を左右する所の諸法則を決定する』にあり、詳しくは、『産業の生産物をば其の形成に與つた諸階級の間に分配することを決定する所の諸法則の研究』である。言ふまでもなく彼れが『主要問題』となした分配論は、階級的分配論である。『土地の生産物は……社會の三階級の間に、即ち土地の所有者と、其の耕作に必要な貯財即ち資本の所有者と、其の者の勞働によつて土地が耕作さるゝ所の勞働者との間に分割される』のであり、『地代、利潤及び勞賃の名の下に、是等の各々の階級に割り當てらるゝ土地の全生産物の比例』が問題である。

17) C. Juglar; Des Crises Commerciales et de leur retour périodique (1863) p. 13.

18) M. Wirth; Geschichte der Handelskrisen (1874) S. 98.

19) H. M. Hyndman; Commercial crises of the Nineteenth Century (1893), 入木澤善次譯; 近世經濟恐慌史論 (1925)

20) G. Cassel; Theoretische Sozialökonomie (1927) S. 474-476.

1) D. Ricardo; Principles of Political Economy and Taxation, Preface p. 1. (Gonner's ed., 1913 以下の引用はすべて此の版による)

2) D. Ricardo; ibid., p. 1. 堀經夫譯; リカアドウ經濟原論 (昭和三年) 一頁、

かくてリカアドウに於ては、經濟學上の總ての問題は、階級的分配の見地から考察さるゝこととなる。例へば彼れの價值論は分配論の理論的基礎をなすものであり、⁶⁾ 彼れの租税論は、『租税が社會の各階級に及ぼす影響を十分に究める』⁷⁾ ことであり、彼れの機械論は、『機械の改良が國家の各種の階級の利害に及ぼす諸結果』⁸⁾ に關する研究であつた。

然らば分配論に於ける彼れの問題は何か？ 彼れが最も尊敬した先師アダム・スミスの分配論は、『價格の構成部分』なる思想を機縁とし、直接には價格論の連續又はその一部として、間接には生産論の一部として論ぜられた。そしてスミスに於ては、此の『價格の構成部分』をなすものは、地代、利潤、勞賃の三者であり、從つて是等三者の自然率を決定する法則の併立的研究が、實質上に分配を論ずる部分の内容となつてゐる。⁹⁾ 然るにリカアドウの見る所では、『アダム・スミス……其他の有能な學者達は、地代の原理を正確に理解してゐないために、地代の問題が徹底的に理解されたる後に於てのみ發見され得る多くの重要な真理を看過した』¹⁰⁾ のであるが、すでに當時に於ては、一八一五年マルサス及びウェストの二氏によつて『殆んど同時に、地代の眞の學説が公にされ』¹¹⁾ て居り、リカアドウにぞつては、『地代は商品價格の構成部分でない』¹²⁾ ことが明らかとなつてゐた。從つてリカアドウに課せられたる問題は、此の正しき地代論の上に立つて、『利潤及び勞賃の諸法則』¹³⁾ を研究するにあつた。

『利潤及び勞賃の諸法則』に於てリカアドウの特に問題としたのは、

私の引用は必ずしも同氏の譯に據つてゐない。以下他の譯書に就てもすべて同様。

3) J. Bonar; Letters of Ricardo to Malthus 1810-1823 (1887) p. 175.

4) D. Ricardo; Principles, p.

5) i. ibid., p. 1.

6) 森田二郎著；リカアドウ價值論の研究(大正十四年)三〇頁以下。

7) D. Ricardo; Principles p. 1. (堀氏譯本一頁)

8) D. Ricardo; Principles, Advertisement to the 3^d edition p. 3. (堀氏譯本三頁)

第一に利潤と勞賃との間に於ける靜的な比率關係であり、

第二に利潤と勞賃との關係の動的變化、即ち『富の増進が利潤及び勞賃に及ぼす結果』¹⁴⁾である。

第一の問題に關する彼れの研究の結果は、利潤と勞賃との間に存する反比例關係の設定であつた。兩者は一物の二分であるから、一方が大なれば他方は小、一方が小なれば他方は大でなければならぬ。即ち『利潤は、勞賃の high か low かに比例して、low か high であらう』¹⁵⁾といふのである。

第二の問題に對して彼れは主張する。先づ第一に『勞働の自然價格は、勞働者及び彼れの家族を維持するに必要な食物、必要品及び便宜品に依存する』¹⁶⁾ものであり、此の『自然價格を左右する所の主要なる商品の一つ(食物)は、之を生産する困難の増すために、次第に高價となつて来る』¹⁷⁾から、そこで『社會の進歩と共に、勞働の自然價格は、常に騰貴する傾向を有する』¹⁸⁾第二に利潤の一般的傾向は、此の勞賃の一般的騰貴の反面として、常に下落傾向をとる。即ち『利潤の自然的傾向は、下落にある、何となれば社會と富の進歩するに従ひ、必要な食物の追加量は、ますます多くの勞働の犠牲によつて得らるゝから』¹⁹⁾と。是れ即ちリカアドウに於ける利潤率遞減の法則である。蓋し此の法則はすでにスミスに依つても認めらるゝ所であるが、たゞスミスに於ては、富の増進に伴ふ資本家間の競争を以つて遞減の原因となせるに反し、リカアドウに於ては、此の原因はどこまでも利潤と勞賃の反比例關係に歸せられてゐる。従つて『勞賃騰貴の或る永續的原因なき限り、資本の蓄積は、利潤を永續的に下落せしめないであらう』²⁰⁾し、『若しも勞働者の必要品が同じ容易さを以つて絶えず増加され得るならば、資本が如何なる額にまで蓄積されやうと

9) 拙稿；『スミスの價格論と分配論』(經濟論叢第十八卷第一號、大正十三年一月)参照。

10) D. Ricardo; Principles, p. 2. (堀氏譯本一——二頁)

11) ibid., p. 1. (同上二頁) 17) ibid., p. 55. (同上七四頁)

13) ibid., p. 2. (同上二頁) 14) ibid., p. 1. (同上二頁)

15) ibid., p. 87-88. (同上——一頁) 16) ibid., p. 70. (同上九二頁)

17) ibid., p. 70. (同上九二頁) 18) ibid., p. 70. (同上九二頁)

19) ibid., p. 98. (同上二二三頁) 20) ibid., p. 272. (同上三一二頁)

も、利潤率または勞賃率には、何等の永續的變化も起り得ないであらう。²¹⁾ 然し現實に於ては、社會の進歩と富の増進は、食物生産の困難を増すが故に、勞賃遞増従つて利潤遞減の結果を來すものであると言ふ。

然らば茲に問題となるは、利潤率遞減の法則と資本蓄積との關係である。社會の進歩——富の増進——資本の蓄積の結果として、利潤率は次第に遞減するものとせば、資本の蓄積は其れ自身一の矛盾に撞着しないかどうか？ 蓋し資本の蓄積を促進する動機は、いふまでもなく利潤の獲得であるから、資本の蓄積が利潤の遞減を來すといふことは、即ち蓄積自身が自己の動機を弱むることであり、蓄積そのもの、自滅乃至自己矛盾を表明するからである。そこで蓄積が利潤に及ぼす影響は、リカアドウに於ても問題とならざるを得ない。彼れはすでに『利潤率に於ける永續的變化の原因』²²⁾を研究する第六章『利潤に就て』に於て、此の問題に觸れざるを得なかつたが、更に特に此の問題に關する特別の一章を設けて、第二十一章『蓄積が利潤及び利子に及ぼす諸結果』に於て、之を詳説するに至つた。思ふに蓄積に内在する矛盾の問題は、後世の經濟學者にとつて、最も重要な理論の一となつて來たのであるが、これが當時のリカアドウに於て、かくの如く問題とされつゝあることは興味あることである。がそれよりも更に興味ある事實は、今ま吾々の問題とする恐慌に關する理論が、リカアドウに於ても亦、蓄積論に關聯して論究されてゐることである。註

註 リカアドウに於ける恐慌論の地位につき、デイル教授は余と異なる見解を採る。²³⁾

21) *ibid.*, p. 272. (同上三一—二頁)

22) *ibid.*, p. 87. (同上——〇頁)

23) K. Diehl; Sozialwissenschaftliche Erläuterungen zu David Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung (1922) II. Bd., S. 415.